

（皇學館大学 講師派遣プログラム 津田学園〔桑名市〕中学・高校／令和八年三月十三日（金）・午後一時三十五分－三時十分）

天才！本居宣長の勉強方――『うひ山ぶみ』

皇學館大学特別教授 博士（神道学） 松浦光修^{みつのぶ}

【前半】

一 ソクラテスの「よく生きる」こと

1 ソクラテス（前四六九頃―前三九九・アテネの哲学者）の言葉
「大切にしなければならぬのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということなのだ」（プラトン『クリトーン』）

二 本居宣長と『古事記伝』

2 山川出版社『日本史用語集 改訂版』（平成三十年）の解説

―① 本居宣長

「一七三〇―一八〇一。国学者。伊勢松坂の医者。真淵に学び、自宅鈴屋で、国学を教え、古典研究を進めて復古神道を主張した。『源氏物語』の注釈書『源氏物語玉の小櫛』では、『源氏物語』を道德面から批判する意見に反対し、独自のもののあわ（は）れ論で評価。

―②『古事記伝』

「宣長の『古事記』注釈書。四四巻。一七六四〜九八年の著。『漢心（からごころ）』（中国的な考え方）である儒教を排し、『古事記』などの古典に見られる日本古来の精神『真心』に返ることを主張。巻一には『直毘靈（なおびのみたま）』を収め、記紀神話（注・『古事記』『日本書紀』の「神代の物語」）に基づく神の道を示した。

3 宣長という学者の評価
「宣長は：学者としては、最上級の、ほとんど不世出の天才である」（香川大学名誉教授・城福勇『本尾宣長』）

三 『うひ山ぶみ』——「自分の国」という自覚と、「利他」の心

4 フランスの大学者・レヴィ・ストロース（一九〇八—二〇〇九）——『古事記』『日本書紀』を読んで、日本の「すばらしさ」を語る

①「私たち西洋人にとっては、一つの深淵が、神話と歴史を隔てています。反対に、私が最も心を惹かれる日本の魅力の一つは、神話と歴史、相互の間に、親密なつながりがあることです」（川田順三・訳『月の裏側—日本文化への視角』）

②「民族学者、文化人類学者として、私が非常に素晴らしいと思うのは、日本が、最も近代的な面においても、最も遠い過去との絆を、持続しつづけていることができる、ということ。私達も、自分たちの根があることは知っているのですが、それを取り戻すのが、大変難しいのです」（大久保喬樹『見出された日本』）

5 『うひ山ぶみ』——「みずからの国」

①「だいたい昔から、日本では、単に『学問』といえは、漢学を意味してきまして。ですから、それと区別するために、今は日本のことを学ぶのを、特別に『和学』とか、『国学』とか呼ぶことになってしまっていますが、これは、たいていへんよくない習慣です。日本人が日本の国のことを学ぶのに、なぜ特別に『なになに学』などと断る必要があるでしょう。単に『学問』といえはいいので、『漢学』の方こそ、区別して『漢学』といえはいいのです」

②「しかし今、世間では、学問とは漢学のことだ、という認識が浸透してしまっています。ですから、ある人が、私の言っていることを信じて、『日本のことを学ぶ学問』という意味で『学問』と言っても、それを聞いた人は、『ああ：、漢学のことか』と間違えてしまうかもしれません。

そういう混乱をさけるために、やむをえず『日本のことを学ぶこと』を、たとえば『皇朝学（こうちょうがく）』とでも表現するのなら、まあ私も：やむをえないかな、と思います。しかし、そういうことを何も考えず、これまでの情性で、『日本のことを学ぶこと』を、あいかわらず『和学』とか『国学』などと呼びつづけるのは、自分が日本人であるという自覚のない、いわば、まるで外国人のようなものの言い方ではありませんか。

唐土、朝鮮、於蘭陀などの外国人が、『日本のことを学ぶこと』を、『和学』とか『国学』とか呼ぶのなら、それは理屈にあっているでしょう。しかし、日本人が日本のことを、外国人が日本のことを呼ぶのと同じように言うのは、まったく道理の通らないことです」。

四 『うひ山ぶみ』——「自分のこと」として学ぶこと

6 「頭」だけで「理解」しても、「生きたもの」にはならない

「すべてのものごとについて言えることであすが、“他人のこと”として考えるのと、“自分のこと”として考えるのでは、同じ考えることとはいっても、浅い深いのちがいが、ずいぶん生じるものです。他人の事として考えていると、自分では、ずいぶん深く考えているつもりでも、それは、自分の事として考える時と比べると、じつは深いところまでは及んでいません。

和歌と同じことで、古代の和歌を、どれだけ深く考えたところで、結局は、他人のことでですから、ある程度以上は深く考えられませんが、（頭だけでも、いざ、自分が和歌を詠んでみると、さすがに自分のことなので、（頭だけではなく）深く心をきるので、（いつのまにか古代の和歌について）その深い意味を知ることができ、また上代風の文章を書いてみなさい』と教えられたのです」（『うひ山ぶみ』）。

五 『うひ山ぶみ』——「ひたすら根気よくつつける」ということ

7 「倦ず、おこたらずして、はげみとつむる」

① 「要するに、『学問』というのは、ただ長い年月、飽きたり、怠けたりしない、で、努力しつづけることが大事なのです。学問の『方法』などというのはい、つは何でもいいのです。そんなことに、あんまり神経をつかう必要はありません。結局のところ、何の成果もあげることとはできないのです」

②

③

六

8

です」。

9 わが国、古来の格言――「情けは、人のためならず」